

3. 検討委員会及び現地検討会の実施状況

(1) 検討委員会の設置

本事業では、北海道地域及び東北地域におけるシカ対策に高い知見を有する有識者からなる検討委員会を設置して、適切に事業を進められるように配慮した。検討委員会は事業実施前と実施後に2回開催した。検討委員を表3-1に示す。なお、検討委員会の座長を酪農学園大学の吉田教授に委任することとなった。

表 3-1 本事業における検討委員メンバー

| 氏名 | 所属 | 職位 |
|-------|--|---------|
| 明石 信廣 | 地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 林業試験場 森林資源部保護グループ | 研究主幹 |
| 江成 広斗 | 山形大学農学部 森林保全管理学分野 | 准教授 |
| 堀野 真一 | 森林総合研究所 鳥獣生態研究室 | 室長 |
| 山内 貴義 | 岩手県環境保健研究センター 地球科学部 | 主査専門研究員 |
| 吉田 剛司 | 酪農学園大学 野生動物保護管理学研究室 | 教授 |

またこれとは別に、現地職員を中心とした現地委員会を北海道静内地域で1回、東北大船渡地域で1回の合計2回実施し、実施内容の共有と技術の普及に努めた。

(2) 第1回検討委員会の概要

本事業の開始にあたり、現場の共有と実施内容についての検討を行った。現場の共有のため、第1回検討委員会は岩手県大船渡市において現地も見学したうえで室内検討を行った。以下に、その概要を記す（写真3-1）。

○日時 平成26年12月3日 午後13時00分~16時30分

○場所 現地見学：岩手県大船渡市末崎山国有林59林班
室内検討：大船渡カメラホール

○参加者 表3-2の名簿の通り。

表 3-2 平成 26 年度森林鳥獣被害対策高度化実証事業・第 1 回検討委員会 参加者名簿

| | 氏名 | 所属 | 職位 | 備考 |
|---------------|-------|--|-----------|----|
| 検討委員 | 明石 信廣 | 地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 林業試験場 森林資源部保護グループ | 研究主幹 | |
| | 江成 広斗 | 山形大学農学部 森林保全管理学分野 | 准教授 | 欠席 |
| | 堀野 眞一 | 森林総合研究所 鳥獣生態研究室 | 室長 | |
| | 山内 貴義 | 岩手県環境保健研究センター 地球科学部 | 主査専門研究員 | |
| | 吉田 剛司 | 酪農学園大学 野生動物保護管理学研究室 | 教授 | |
| 林野庁 | 馬場 敏郎 | 林野庁 研究指導課森林保護対策室 | 室長 | |
| | 兼光 修平 | 林野庁 経営企画課 保全対策係 | | |
| 森林管理局 | 高井 清昭 | 北海道森林管理局 保全課 | 鑑定官 | |
| | 山田 晴康 | | 利用調整係長 | |
| | 青山 一郎 | 東北森林管理局 技術普及課 | 課長 | |
| | 寺田 治男 | | 企画官 | |
| 三陸中部 森林管理署 | 橋爪 一彰 | 三陸中部森林管理署 | 署長 | |
| | 高橋 義浩 | | 総括森林整備官 | |
| オブザーバー | 奥村 忠誠 | 株式会社 野生動物保護管理事務所 調査解析部 | 部長 | |
| | 木下 静恵 | 大船渡市役場 農林水産部 農林課 | 鳥獣被害対策推進員 | |
| | 工藤 公也 | 一般社団法人 日本森林技術協会 東北事務所 | 所長 | |
| 事務局 | 宇野 壮春 | 合同会社 東北野生動物保護管理センター | 代表社員 | |
| | 関 健太郎 | | 研究員 | |
| | 赤松 里香 | 特定非営利活動法人 EnVision環境保全事務所 | 理事長 | |
| | 村井 拓成 | | 研究員 | |
| | 立木 靖之 | | 研究員 | |

※委員は五十音順

※敬称略

○検討内容

- ・ 本事業の背景目的の整理
- ・ 大船渡地域の特徴と取り組み内容の検討
- ・ 静内地域の特徴と取り組み内容の検討
- ・ 今後のスケジュールについて



○質疑応答と主な意見

Q.1 一般狩猟がない地域こそ今回のような事業を実施する意味があると思うがいかがか？

A.1 今年度は導入ということもあって、事業が実施しやすいところを署から申告してもらって、とりあえずこの場所で何が出来るかということを議論していきたい。

Q.2 地元のハンターさんはこの事業を実施することに反対はしていないか？

A.2 していません（大船渡市）

Q.3 GPS 首輪はどれくらいの個数を付ければ良いとお考えですか？

A.3 10 個や 20 個装着できれば、この周辺のシカの動きを知ることが出来るかもしれませんが（座長）

Q.4 大船渡では捕獲した個体の処理方法はどのようにされているか？

A.4 放射能の問題もあり、処分されています。

Q.5 この事業を通じての効果検証はせねばならないが、単年度事業の中で森林被害の減少などは見ることが難しい。雪崩が発生するところでは事業が進められない。何か意見はありますか？（座長）

A.5 2 つの視点があります。捕獲効率やコストと、被害の把握です。しかし、年度内に結果が出るとすれば、捕獲効率の面ではないかと思う（明石委員）。

Q.6 大船渡のシカはスレているか？

A.6 スレていると思います。遠野では箱わな捕獲が上手くいっていません。（山内委員）

Q.7 日高地方のような奥地でシカを捕獲する効果とは？

A.7 そのためにも GPS 首輪を装着したいというのが本音。この地域のシカは全く行動が分からないので、その動きを見ながら検討します。

Q.8 単年度で効果判定というのは難しい。費用面の比較は検討しているか？単純に費用の高い安いから安全性や確実性を評価するのが良いのでは。

A.8 コストに関しては 1 つの軸であると考えています。

Q.9 岩手は電気殺をほとんど実施していないので、マニュアル化するかという点はどうお考えか。

A.9 イノシシの捕獲事業では銃を使わずに電気を用いています。シカで試行したことは東北ではありませんが、この事業では試行してみようと思っています。

意見 大船渡地域では、ハンター密度も高いなかでどのようにわなを用いた捕獲を実施していくか、また、日高地域では携帯電話の電波も届かないようなところでどのような技術が適切か検討していただきたい。

意見 東北地域は GPS 首輪を用いた調査事例が少なく、シカの季節移動に関する情報が少ない。この地域では GPS 首輪による調査が重要だと思う。

意見 事業実施地域における残滓の処理能力については、前もって知っておく必要がある。

- 意見** スレているシカを捕獲するのは難しい。コストに係るので、コスト計算をする際にはそのあたりも整理すべき。
- 意見** 落とし扉についても検証をしてほしい。日高のような現場では AI ゲートが有効かどうかなどについても検証すべき。
- 意見** 現場での雪崩や銃等の安全性を十分に確保して、地域の方とよい関係を構築して、この事業を進めてください。無理をしないことが大切だと思います

※上記表内の**意見**は、検討委員及び座長から出された意見を示す

(3) 北海道静内地域における現地検討会概要

①現地検討会

事業の実施状況を報告し、関係者と意見交換を行うことを目的に平成 27 年 2 月 10 日に現地検討会を開催した。当初は現地に赴いて、設置したわなの見学等を実施する予定であったが、現地(122 林班)へ通じる道路に雪崩が発生し、通行ができなくなったため、急きょ室内のみの開催に切り替えて実施した。なお、現地検討会終了後、明石委員、林野庁、北海道森林管理局、日高南部森林管理署の一部職員により、下流側の事業実施場所(108 林班)の視察を実施した。以下、現地検討会の実施結果を示す(写真 3-2)。

○日 時 平成 27 年 2 月 10 日 午前 11 時 00 分~12 時 30 分

○場 所 日高南部森林管理署会議室

○参加者 明石検討委員、林野庁、北海道森林管理局、日高南部森林管理署、北海道日高振興局、新ひだか町役場、北海道猟友会日高中部支部静内分会
(計 30 名)

○実施内容

- ・事業の概要についての説明
- ・ルートセンサス調査
- ・餌による誘引および嗜好性試験
- ・GPS 首輪による追跡調査
- ・簡易囲いわなによる捕獲
- ・UAV によるモニタリング
- ・意見交換および質疑応答



写真 3-2 現地検討会風景

○質疑応答と主な意見

【簡易囲いわなによる試験捕獲に関すること】

- Q.1 簡易囲いわなでの、年間捕獲頭数はどのくらい予定しているのか。
- A.1 大型の囲いわなの場合は、1シーズンで50頭くらいが目標となる。今回は小型になるので、目標は30頭くらいと思っているが、運用の仕方によって変わってくる。
- Q.2 シカが急激に増えていて、急いで数を減らさなくてはいけないときに、試行錯誤的に獲っていて間に合うのか。なぜ、この場所なのか。
- A.2 今回はあくまでモデル事業として実施場所を選んでいる。この場所で必要な対策というのは、また別な話ということで理解していただきたい。
- Q.3 遠くのシカを銃器で獲ると、GPS首輪を付けたシカを獲る可能性もあるが、間違えて獲った場合は、何処に連絡すればよいか。首輪を付けたシカの特徴を教えてください。
- A.3 特徴や連絡場所などを記した文書を、猟友会に配布したところなので確認してほしい。獲ってしまった場合は回収に伺うので、連絡をしてほしい。
- Q.4 囲いわなの強度に疑問があったが、今回は壊れていないようなので、この場所のシカが大人しかったのかどうか。
- A.4 人が近づくとつよくあたることもあるが、今のところは十分強度があると考えている。
- Q.5 夏場のオスシカなら、囲いを跳び越すのではないか。
- A.5 その検証を夏場にやってみたいと思う。オリジナルは兵庫で製作されたもので2mしかなかったが、高さ2.7mとして、北海道向けに改良している。
- Q.6 他の動物の、捕獲には使えないのか。
- A.6 本州ではサルやイノシシ用に改良して使用している。
- Q.7 2頭で設定していたが、3-4頭も可能なのか。

A.7 設定の仕方ので可能なので機会があればやってみたいと思う。ただし、4-5頭になると、わなから出て行ったり、追い出すシカも出てくるので、頭数を見極めるのは難しい。今回はわなの強度などを見たかったので2頭にした。

Q.8 センサーを含めた経費は、いくら位か。

A.8 概算でセンサー部 80 万円、わなが 20 万円の合計 100 万円です。

Q.9 バッテリーは寒冷地でも稼動していたか。

A.9 厳寒を体験していないが不具合はでていない。バッテリー交換の頻度を高くして対応すれば、問題が無いのではと考える。

【UAV に関すること】

Q.10 電波が遠くまで届く UAV はあるのか。

A.10 狭い範囲を飛ばすのが UAV の特徴なので、それより広い範囲（高見ダム周辺とか静内ダム周辺など）はヘリセンサスなどが良い。UAV は、手軽に安く飛ばせるというのが、特徴である。

Q.11 シカが、驚かないか。

A.11 多少音が高いので、シカが気にしているかなという感じはある。

Q.12 雪には耐えられるか。

A.12 少しくらいの雪は大丈夫だが、雨とか雪には弱い。風は、10mくらいまで大丈夫。

Q.13 本体は、いくら位か。

A.13 おおよそ、60 万円位になる。

【事業全般について】

Q.14 モバイルカリングは、選択肢の中に入っていないのか。

A.14 誘引狙撃も選択肢には入っていたが、今までハンターが入っていない地域ということもあり、今回は囲いわなという選択にした。

Q.15 来年度以降は、どうするのか

A.15 来年度以降は、地元にあった対策をどうやっていくか、ということを示しながら、地域で考えていただきたい。

意見 ハンターの立場としては、どうしたら獲れなくなったシカを獲れるようにすることができるか、シカを減らすことができるかということの新しい取り組みをして欲しいと思う。

意見 簡易囲いわなでシカを捕獲して、止め射しは銃器を使用したとのことだが、血を流したらわなは移動する必要があると思う。

意見 わなにクマが付きやすいので、注意する必要があるのではないかと。

②現地見学会

現地検討会での現場視察の中止を受け、代替措置として日高南部森林管理署職員を対象に現地見学会を開催した。以下、現地見学会の内容を示す（写真 3-3）。

○日 時 平成 27 年 2 月 23 日 午後 13 時 30 分~14 時 30 分

○場 所 日高南部森林管理署 108 林班

○参 加 者 日高南部森林管理署職員（計 18 名）

- 実施内容
- ・簡易囲いわなの説明
 - ・UAV によるデモ飛行
 - ・意見交換および質疑応答



○質疑応答と主な意見

【簡易囲いわなによる試験捕獲に関すること】

Q.1 止めさしはどのようにしているのか？

A.1 口径の小さいライフル銃を使用し、ワナから 40m ほど離れた位置から撃っている。本州の事例では、ポケットネットを使用して、電気殺を行っている事例もある。止めさしをどうするかは普及をする際のポイントになる。

Q.2 餌の量と金額は？

A.2 ヘイキューブの価格は 30 kg で 2,400 円ぐらい。1 回の給餌で約 15 kg 使用している。

Q.3 このワナを運用するには狩猟免許があればよいのか？

A.3 狩猟免許のうち、わな免許が必要になる。

Q.4 捕獲した個体はどうしているのか？

A.4 地元の食肉加工施設に引き取ってもらっている。当初はワナによる損傷も心配されたが、現状では問題ないと言われている。仮に廃棄をするとすると、日高中部環境センターに持ち込むのに、一定の大きさ以下に解体する必要がある。

Q.5 ワナの設置場所の選び方は？

A.5 いろいろな要因がある。まずはシカがいることが重要。事前に餌による誘引を実施して誘引できていれば多少動かしてもよい。地形としては平らな場所。捕獲したシカを搬出しやすいことも大事である。また、今回は銃器で止めさしをするので、背後に安土がある場所を選んでいる。

Q.6 もっとワナを広くするのはどうか？

A.6 仕組みとしては広くできる。ただし、今の広さ (4×4m) ではシカが助走をとれなくて、高く飛び上がることができずにいる。広くすることで、多数のシカを捕獲できる可能性も高まるが、シカが激しく動き回ったり、飛び跳ねたりする恐れも出てくる。

Q.7 他の動物が誘引されることはあるか？

A.7 使用する餌の種類によっては、タヌキやアライグマ、ヒグマが誘引される可能性もあるが、今回使用しているヘイキューブのように牧草系の餌であればその心配はない。

Q.8 コストを抑える意味で、人がゲートを落とすのが良いように思うが。

A.8 人が直接観察しながら落とす方法も可能だが、シカは非常に敏感なので、人の気配を察知してしまう。また、出てくる時間帯が確定されていればよいが、そうでない場合には、待機する手間と時間もかかってくる。

【UAVに関すること】

Q.9 素材は何でできているのか？

A.9 骨組みはカーボン素材を主に使用している。

Q.10 どの程度の重さまで付加できるのか？

A.10 今回のタイプでは1-2kgまで付加できる。

Q.11 映している映像をその場で直接見ることはできるのか？

A.11 今回の仕様ではできないが、技術的には可能である。ただし、WiFiを使用するので、概ね100m圏内に限定される。

Q.12 どの程度の風力まで運用できるか？

A.12 風速が6m以上になってくると操縦が難しくなってくる。

(4) 東北大船渡地域における現地検討会概要

平成27年2月13日に東北大船渡地域において、周辺地域の関係者への情報還元や意見交換を目的とした現地検討会を実施した。以下にその概要を記す(写真3-4)。

○日 時 平成27年2月13日 午後13時00分~15時40分

○場 所 末崎山国有林59林班および大船渡リアスホール会議室1

○参加者 山内検討委員、林野庁、東北森林管理局、岩手県、大船渡市、陸前高田市、釜石市、大槌町、三陸北部森林管理署、三陸中部森林管理署、岩手南部森林管理署遠野支署、東北農政局、大船渡猟友会、高田猟友会(計32名)

○実施内容 【現地視察(末崎山国有林59林班内)】

- ・事業の概要についての説明
- ・簡易囲いわなによる試験捕獲の技術解説および成果の中間報告
- ・電殺機を用いた止めさし方法の技術解説
- ・GPS首輪を用いた行動追跡調査結果の中間報告
- ・質疑応答

【意見交換会(大船渡リアスホール会議室1)】

- ・意見交換および質疑応答



写真 3-4 現地視察風景と意見交換会風景

○意見交換会での質疑応答と主な意見

【簡易囲いわなによる試験捕獲に関すること】

- Q.1 簡易囲いわなで最大で3頭捕獲とのことだが、捕り逃した個体はいないのか。もしいたとしたら、わなを警戒するのではないか。
- A.1 扉を落とす前に映像で他個体が周辺にいないか、約20分間確認してから扉を落とすようにした。
- Q.2 シカを捕獲する囲いわなの大きさとして、今回使用したものの大きさは適切か。
- A.2 大きければ、より多くのシカが中に入ることができるかもしれないが、今回はわなの設置や移設にかかる労力を軽減するため、比較的小さいものを使用している。
- Q.3 ビートパルプやチモシーなど聞き慣れないが、どんなものか。
- A.3 ビートパルプは砂糖の原料となるシュガービートの搾りかすを圧縮してペレット状に加工したもの、チモシーは牧草をイメージしてもらえば良い。また、ヘイキューブはアルファルファなどの牧草を圧縮成形したものである。いずれも家畜用飼料として市販されている。
- Q.4 囲いわなの設置には免許等が必要か。今回は遠隔で操作できる装置を使用しているが、扉を落とすボタンを押す人は捕獲従事者である必要があるのか。
- A.4 囲いわなで動物を捕獲する行為に対してわな猟免許や許可が必要となる（場合によっては必要でない場合もある）。ボタンを押す人も厳密には捕獲従事者である必要がある。
- Q.5 遠野市内でも囲いわなによる捕獲を試みているが、捕獲できていないと聞く。シカが囲いわな自体を警戒している様子は見られたか。
- A.5 囲いわなを設置後、翌日にはシカが出没し中まで入った。映像を見る限り、警戒

している様子はなかった。囲いわなを用いた捕獲では設置場所の選定がとても重要になる。痕跡から 50m 以上離れている場所に設置した場合、誘引や捕獲は難しい。シカが出没しないようなら、移動した方が効率が良い。

意見 陸前高田市で囲いわなを導入して捕獲を試みている。使用している囲いわなは今回のものより大型で外壁にネットを利用しているが、2～3 人での設置作業は時間もかかり大変である。今回のものは使い勝手が良さそう。大きければ良いものでもないのだと感じた。

意見 シカの警戒心が高くなり、昼間流し猟では捕獲が難しくなってきた。移設できる囲いわなの需要は高いと思う。

【電殺機による止めさしについて】

Q.6 この方法に違法性はないのか。

A.6 学会等でもいろいろと意見が出ているが、現状では所持や使用について取り締まる法律はないようである。今後、法的にも整備されていく可能性はある。安全対策についてはマニュアルの作成などの対応が必要だと考えている。

Q.7 電気ショックによる止めさしは確実か。生き返ることはないか。

A.7 完全に動きが止まるまで少し長めの時間あてている。今のところそういった事例はない。

意見 今回は囲いわなによる捕獲なので安全かもしれないが、例えばくくりわなで捕獲された個体に用いる場合、危険だし、事故の発生も考えられる。安易に普及していくことはどうかと思う。

意見 民家の裏など銃が使えない場所での止めさしの方法として需要がある。

【GPS 首輪を用いた行動追跡調査について】

Q.8 今後、成獣のオスにも是非装着してもらいたい。メスとは全く違う動きをするはずだ。

A.8 今回の事業では、GPS 首輪の装着が 1 頭だけだったので、定着性が強く、繁殖の母体となるメスを対象とした。今後オスにも装着して、データを蓄積する必要があると考えている。

【事業全般について】

Q.9 この事業は今年度だけか。

A.9 来年度も継続する方向で動いている。同じ場所をモデル地区とするかどうかは検討中である。

※なお、現地検討会実施後には複数の参加者から簡易囲いわな、「まる三重ホカクン」、電殺機による止めさしについて問い合わせがあり、周辺市町村では実際に簡易囲いわな及び「まる三重ホカクン」の導入に向けた動きもみられた。

(5) 第2回検討委員会の概要

平成27年3月5日に、東京都内において第2回検討委員会を実施した。この第2回検討委員会では、本事業において北海道静内地域及び東北大船渡地域において実施した内容及び結果概要を報告し、取りまとめの方針などについて検討した。以下にその概要を記す(写真3-5)。

○日 時 平成27年3月5日 午後13時00分~16時00分

○場 所 オフィス東京
東京都中央区京橋1丁目6番8号

○参加者 表3-3の名簿の通り。

○実施内容

- ・ 北海道静内地域における結果の概要
- ・ 東北地域における結果概要
- ・ 事業を通じて得られた成果・課題・提案

表 3-3 第 2 回検討委員会 出席者名簿

| | 氏名 | 所属 | 職位 | 備考 |
|-------|--------|--|-----------|----|
| 検討委員 | 明石 信廣 | 地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 林業試験場 森林資源部保護グループ | 研究主幹 | |
| | 江成 広斗 | 山形大学農学部 森林保全管理学分野 | 准教授 | 欠席 |
| | 堀野 眞一 | 森林総合研究所 鳥獣生態研究室 | 室長 | 欠席 |
| | 山内 貴義 | 岩手県環境保健研究センター 地球科学部 | 主査専門研究員 | |
| | 吉田 剛司 | 酪農学園大学 野生動物保護管理学研究室 | 教授 | |
| 林野庁 | 馬場 敏郎 | 研究指導課 森林保護対策室長 | 室長 | |
| | 吉村 麻美 | 研究指導課 森林保護対策室 | 指導係長 | |
| | 竹崎 桂子 | 経営企画課 国有林野生生態系保全室 | 環境保護調整係長 | |
| | 兼光 修平 | 経営企画課 国有林野生生態系保全室 | 保全対策係 | |
| 森林管理局 | 山田 晴康 | 北海道森林管理局 保全課 | 利用調整係長 | |
| | 寺田 治男 | 東北森林管理局 技術普及課 | 企画官(自然再生) | |
| 事務局 | 宇野 壮春 | 合同会社 東北野生動物保護管理センター | 代表社員 | |
| | 関 健太郎 | | 研究員 | |
| | 赤松 里香 | 特定非営利活動法人 EnVision環境保全事務所 | 理事長 | |
| | 早稲田 宏一 | | 研究員 | |
| | 立木 靖之 | | 研究員 | |

※委員は五十音順

※敬称略



写真 3-5 第 2 回検討委員会風景

○質疑応答と主な意見

Q.1 ルートセンサスで、積雪が増えると目撃が増えていた。考えられる理由や先行事例はあるか。

A.1 下流域の軽種馬の牧草地に積雪が増えると、利用しにくくなって山に上がるのではないかと考えている。広葉樹林や法面の牧草を食べるなど餌の環境によるものと思われる。
また、斜面方位も重要で、南斜面に多い傾向。雪がとけているからということが理由と思われる。

Q.2 雌雄の性比はどうか。

A.2 メスが圧倒的に多いです。

Q.3 簡易囲いわなを用いてもスレてくるのではないか。

A.3 日高地方の 122 林班ではそのような傾向は見られなかった。しかし、過去の経験で、3 回ほど捕獲すると来なくなったこともある。その場合、わなの位置を変えるとまた来るようになったこともあった。「場所と物 (ワナ)」に警戒しているものと推測される。

Q.4 止めさしは動物福祉の観点が必要。小口径ライフルを利用されていたが、ほかの地域で応用できるか。

A.4 ある程度技術がいると思われます。

Q.5 銃器を使って止め射しすることと、銃所持者が少なくなってきてわなで捕獲するという背景が対立しないか。

A.5 それも考えられます。兵庫県で考案されたような小型のネット (ポケットネット) を用いる手法を、事業の最後に試す予定です。

Q.6 かぞえもんのセンサーの位置が高いのではないか。

- A.6 まずはマニュアルどおり試してみたが、今のところ大きな問題はありません。
- Q.7 ライフルによる止めさしで、AI ゲートが破損するのでは？
- A.7 わなの配置や角度を工夫して、狙撃地点から当たらないようにしています。
- Q.8 日高のような一杯出てきているところでは、わな以外にどのような方法が考えられるか
- A.8 シカの頭数が多いならば囲いわな、場合によっては誘引狙撃、たくさん置くならば簡易囲いわなも手法として考えられる。
- Q.9 当該箇所のシカの生息状況などの基礎情報を取りまとめ時に追加してほしい。
- A.9 了解しました。
- 意見** モバイルカリングや簡易囲いわなという手法がありきというのはおかしいと思っている。その地域における問題をどのようにすれば解決するかという観点から手法を選ぶべき。ほかの地域でやる場合も、手法を絞らないでやるべきである。
- 意見** 銃猟ハンターが減ってきて、わな捕獲が見直されている。今回は森林内で利用する際の問題（ソーラーパネルなど）が抽出できて良かったと思う。
- 意見** この事業では、森林内でシカを減らすための技術論を行ってほしい。
- 意見** 銃猟やくくりわなのような他の手法との CPUE の比較は困難。捕獲努力量を整理することは重要だが、単純な比較はできない。

※上記表内の**意見**は、検討委員及び座長から出された意見を示す

(6) 成果報告会の概要

平成 27 年 3 月 10 日に、東京都内において開催された本事業の成果報告会において、第 2 回検討委員会の結果を踏まえた内容について発表を行った（写真 3-6）。



写真 3-6 成果報告会での発表と有識者によるパネルディスカッションの様子